

## 特集・興教大師研究 序

吉田宏哲

平成四年の興教大師八五〇年御遠忌をあと三年後に控えて、『現代密教』第二号は「興教大師特集」を企画した。その執筆の陣容は目次の如くである。それぞれの論文がまことにもって納得のいく内容を開陳しており、興教大師教義の闡明と宣揚とに寄与するところ多大である。

楮、真言宗中興の祖、興教大師覺鑿上人については、我々真言宗智山派ならびに真言宗豊山派、新義真言宗の三宗の信徒の信仰の対象である以外は、必ずしも我が国の民衆や学者、宗教者の間に知られているとはいえない。また、それではこれら関連の三宗の僧侶が信仰とは別に覺鑿上人について如何ほどの知識を持ち合わせているかと問うと、まことにお粗末至極であることは我が身も含めて身の縮む思いなる者が大方であろう。

しかしながら、新義の末徒である我々僧俗ですらが興教大師についてよく知らないという実情にはいくつかの理由がある。その第一は我々教師自身が興教大師の名号を唱えているのみで、実際には少しも興教大師について勉強をしなかったということである。教師が勉強をしないで檀信徒にこれを説かない、いや説けないから、檀信徒も興教大師について何も知らないということになる。いわんや新義にかかわりなき僧俗においておや。第二・第三の理由には時代によるかと、興教大師は弘法大師の陰に隠れてしまったとかいろいろあるが、これ以上は問わないことにしよう。というのは興教大師について知らないという恥ずべき現情は第一の理由だけで充分だからである。

ただ問題が残るとすれば、いやしくも信仰の対象である祖師について殆んど何も知らなくてもそれで済ましているという無慚無愧な態度と、その無慚無愧が少しも糾弾されないうで罷り通るという時代の不思議さである。

一体これはこの時代の感覚が正常なのか、それともこの時代をおかしいと思う感覚が正常なのか、自分でもわけがわからなくなってくる。しかし、一方では、興教大師を勉強しなくても、「南無興教大師」と唱え、あるいは五

十年に一度の御遠忌奉修を事業として遂行すればそれで世間が納得するという代補の構造がある。つまり、事業が理解の代わりをするのである。あるいは形式が内容を補い、内容の代わりをして、そのために内容はいつも先送りされて永遠にその地位を取り戻すことができないのである。あるいは取り戻さなくてもそれで済んでいるという事情がある。

ただせめていえることは、かりに内容が取り戻せなくても、その取り戻せないという事実が気がつくことは大事なことではないか。あるいは事業が理解を代補しても、その代補性に目覚めていることは必要なことではないか。さらによいえば、無慚無愧は慚愧によってしか顕わされないとすれば、それを糾弾するよりもむしろ慚愧することがはじめになくてはならないのではないか。あるいは誰でも救済があるかの如き祈りですらも、救済の代補である如き時代にあつては、その祈りの代補性にすら目覚めていなければならないのではないか。

さてこの題にあつて、我が智山伝法院を代表する諸師が、興教大師理解のための魁として六篇の力作を発表された。まず宮坂院長のそれは、興教大師の浄土思想について従来の論致には見られない総合的な視野と透徹した論旨でこれを明らかにされた。次に広澤講師は覚鑿上人が弘法大師とはちがった時代に生きつつ弘法大師の教学にどのようにかわつたかを問うことによつて、即身成仏と浄土往生というアンヴィヴァレントなテーゼをどう解決されたかについて、きわめて鋭くかつ深層に至る思索力をもつてこれを解明した。つぎに村磯講師の「石手荘と興教大師」なる論文は、興教大師が石手荘の奇進を受けたことによつてストレートに伝法会の再興が実現したとされている従来の通説を破つて、いくつかの付帯条件があつてはじめて伝法会料としての石手荘が可能であつたことを指摘した。さらに真保・布施両講師はそれぞれ教化と事相の立場より興教大師像の新側面を興味深く紹介している。

債権者に興教大師覚鑿上人は苟も初地の菩薩たることを公言せられている。しかもまた阿鼻地獄に陥ることを瀟々として没後追修を弟子たちに委嘱せられている。この二つの事実主体的に肉迫すること、これが今後我々に残された興教大師信仰の課題であるといえよう。